

小学校の連合音楽会に向けた器楽合奏の指導法研究 — 「良い響き」を求めた楽器奏法の工夫 —

平井 裕也, 平井 李枝

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月

小学校の連合音楽会に向けた器楽合奏の指導法研究 —「良い響き」を求めた楽器奏法の工夫—

A study on teaching method for the School Band, preparing
for the Union Concert of Elementary Schools

—Research for obtaining “rich sound” for each instrument, by
teaching performance technique—

平井 裕也[†], 平井 李枝[‡]
HIRAI Hiroya and HIRAI Rie

概要

本研究は、小学校の音楽科における器楽合奏の指導に焦点を当て「音の響きを感じながら奏法を工夫させる指導法」を確立することを目的としている。筆頭著者（平井裕也）が指導者として2016年に行った授業から、連合音楽会に向けた器楽合奏の学習過程を詳細に記述しながら、提案した指導法が児童の探求心を高め、演奏の完成度を向上させる効果があることを明らかにした。

キーワード: 小学校、音楽、器楽、合奏、連合音楽会、音の響き、演奏法

1. はじめに

本研究は、小学校の音楽授業における器楽合奏に焦点を当て、児童が自ら進んで「良い響き」を求めて楽器奏法を工夫できるような指導法を確立することを目的としている。2016年に授業者が東京都立小学校連合音楽会に向けて行った指導を検証し、その効果を明らかにするものである。

連合音楽会は、市区町村単位で複数の学校が合同で行う音楽会であり、それぞれの学校が音楽授業の成果発表の場として位置づけている。いわば学校対抗音楽会であり、音楽担当教員の力量が試される行事といえる。演奏発表は合奏や合唱などで、東京都では1校あたり7分程度となっている。授業者は、2008年から2017年までの9年間、東京都立小学校の音楽専科教員として、児童の音楽指導を行ってきた。連合音楽会は学校の恒例行事であり、主に第5学年の児童が参加することとなっていた。器楽演奏の基礎は楽譜通りに間違えずに奏することであるが、それだけでは合奏の奏者としての役割を果たすことはできない。豊かな表現力を持った器楽合奏として楽曲を完成させるためには、児童が「音の響き」に敏感になる事が重要であると考えた。そこで、2016年は「音の響き」を感じさせることに注力し、児童が演奏する楽器の響きを意識し、様々な奏法を工夫しながら習得できるような指導法を実践することにした。本論文では、連合音楽会に向け発表曲の《アフリカン・シンフォニー》が完成するまでの学習過程を詳細に記述しながら分析考察を行い、本研究で提案する指導法の効果を検証する。

[†] 大阪教育大学 教育学部 教員養成課程 音楽教育部門 特任講師

[‡] 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: rie@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

●研究の対象

時期 2016年7月から12月

場所 東京都公立小学校(以下A小学校)

対象学年 第5学年 60名

対象曲目 ヴァン・マッコイ作曲《アフリカン・シンフォニー》

授業者 平井裕也(筆頭著者)

2. 連合音楽会における器楽合奏の発表に向けた学習過程

A小学校は、毎年11月下旬に市内の全小学校が参加する連合音楽会に出演していた。また11月には、校内の学芸的行事が行われていた。各行事の活動と並行して円滑に進められるように学習計画を立てた(図1)。

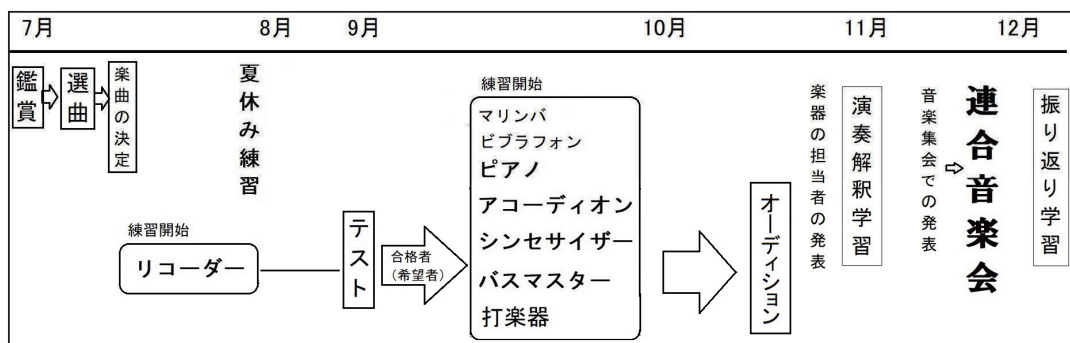


図1 連合音楽会に向けた学習過程

3. 選曲のための鑑賞活動

連合音楽会に向けた学習は、まず鑑賞から始めた。これは連合音楽会で発表する楽曲を児童に選ばせるためである。6曲の候補楽曲の児童用器楽合奏編曲版を鑑賞させ、最も気に入った曲についてアンケート調査を実施した。児童の演奏レベルにふさわしいと

授業者が提示した候補曲は以下の6曲である。《情熱大陸》、《テキーラ》、〈威風堂々〉、《アフリカン・シンフォニー》、〈木星〉、《風になりたい》。

候補曲の鑑賞においては、担当楽器の選定を見越して、どの楽器が最も良く響いているかという点に注意させた。

その結果、《アフリカン・シンフォニー》が最も得票数が高かったため、この曲を発表曲に選定した。選曲理由は、「甲子園大会で使われている曲だから演奏してみたいと思った」、「リズムがカッコよかったから」、「この曲のボンゴを叩いてみたいと思ったから」、「元気が出てくる曲だったから」などであった。ラテン楽器であるボンゴやコンガのリズムが、子どもたちにとって楽曲の魅力となっていることが明らかになった。

- | |
|--|
| <p>①《情熱大陸》「冒頭のアコーディオンの音」</p> <p>②《テキーラ》「冒頭のリコーダーの音」</p> <p>③〈威風堂々〉「曲中に使用される鉄琴の音」</p> <p>④《アフリカン・シンフォニー》「冒頭のボンゴ・コンガの音」</p> <p>⑤〈木星〉「曲中に使用されるシンバルの音」</p> <p>⑥《風になりたい》「クレッシェンド奏法によるリコーダーの音」</p> |
|--|

図2 候補曲の鑑賞で児童が捉えたよく響く音

4. 5年生の全児童を対象に実施するリズムと主旋律の指導

《アフリカン・シンフォニー *African Symphony*》は、ヴァン・マッコイ (Van McCoy 1940-1979) が1974年に発表した楽曲である。原曲は吹奏楽を中心としたオーケストラ版である。日本では吹奏楽団が演奏するほか、甲子園等の野球応援でも頻繁に使用されている。近年では連合音楽会等で児童の器楽合奏として注目を集めている楽曲である。小学生の器楽合奏は楽器編成の関係で、ミュージックエイト社刊ドレミファ器楽SK-280「アフリカン・シンフォニー」の編曲楽譜を使用している。

《アフリカン・シンフォニー》はラテン打楽器のリズムに特徴がある楽曲である。曲の冒頭から終わりまで、ボンゴとコンガが一定のリズムを刻み続け、それに合わせて主旋律が奏される。これまでの指導で、合唱や合奏の学習において、自分の担当パートのみを練習させることは、楽曲の完成度に悪影響を与えていることから、まずは出演児童全員が楽曲を理解することが重要であると考えた。そこで、ボンゴとコンガのリズム、およびリコーダーによる主旋律を全員が演奏できるように指導を行った。以下にその指導の詳細を記述する。

(1) ボンゴとコンガのリズム指導

リズム練習は、全体活動とグループ活動で構成した。楽器の数が限られているため、全体活動では、授業者が鳴らすリズムを児童らがボディーパーカッションや椅子の座面を手のひらで打ち鳴らすことで模倣させた。グループ活動では、6名でリレー形式を用いた。授業者は「アクセント奏法(鼓面を打つ瞬間に力を入れ、鼓面に手が当たった瞬間に脱力して離す動作を利用した奏法)」と、「手が鼓面から離れた後も力を入れたままの奏法」の2種類を実演し音の響きの違いについて比較させた。児童は、アクセント奏法が良く響いていることに気付いた。そして実践を通して鼓面の打つ位置により響きが変化することにも気づかせ、どの位置を打つと楽器が良く響くかについて工夫させた。楽曲を理解するだけでなく、打楽器の演奏体験を通して、楽器の響きや響かせ方を工夫させることを目的に実施した。

図2と図3にボンゴやコンガの楽器形状や設置方法について提示する。

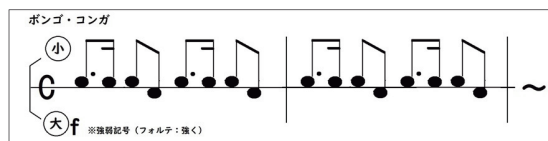
児童には、譜例1を示しながら演奏方法を指導した。「①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧」というように1小節に8分音符単位で8拍を刻ませながら「④」と「⑧」の拍で低音のボンゴやコンガを響かせるイメージを捉えさせた。また授業者による模範演奏を見せた際に、児童らは両手を交差させる動きに強い関心を持ち、譜例2を見せながら、両手の交差を伴った奏法の練習にも取り組ませた。リズム打ちが出来るようになると、メトロノームに合わせ一定のリズムを正確に刻む学習に入った。



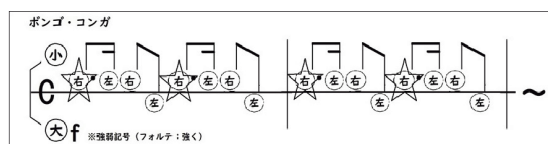
図2 ボンゴの形状と設置方法 写真1 ボンゴの演奏



図3 コンガの形状と設置 写真2 コンガの演奏



譜例1 「ボンゴとコンガの抜粋譜」第1小節～第2小節



譜例2 「ボンゴとコンガの奏法示す楽譜」第1小節～第2小節

最初は耳でメトロノームを聴きリズムを打つことに児童らは大変苦勞していたが、練習を続けることにより自然と身体から正確なリズム感が生み出されるようになった。このリズム学習は児童らにとって根気と忍耐がいる学習であった。

(2) リコーダーによる主旋律の指導

まず、リコーダー・パートの楽譜に、音の確認のため、固定ド音名を音符の下に書き加えさせた。その後、模範演奏の音源を聴かせ、響かせたい音について話し合いをさせ、ワークシートに記入させた。その結果、「長く伸ばす音を響かせたい」という意見が多数みられ、長く伸ばす音を意識して響かせる練習に取り組みせることにした。リコーダー演奏での問題点は、響かせようとする意志に反し音程に乱れが生じていたことである。これはリコーダーに息の量を一定に送り込んでいないことに原因があった。この解決方法として、腹筋に力を入れた状態で一定量の息を吐き続けるロングトーンの練習方法を取り入れた。まず床に寝た状態でリコーダーを構え、僅かに上半身を浮かして音を出し続ける方法である。ペアグループで取り組みせ、交代で音程を確かめながら繰り返し練習させた。その結果、音程が安定し練習の効果が確認できた。児童からも「音がきれいに響いてきた、周りの音が揃ってきた」などの成果が聞かれた。技能の定着に向け夏休み中の課題として引き続き練習に取り組みさせた。

5. 各楽器のオーディション

学習過程において、リズムとリコーダーの習得は全員の課題とし、リコーダーは途中で到達度テストを行った。このテストに合格した者には、リコーダー以外の希望楽器の楽譜とオーディションに参加できる資格を与えた。

オーディションの対象となる楽器は、ボンゴ、コンガ、大太鼓、ティンパニ、シンバル、ピアノ、アコーディオン、シンセサイザー、バスマスター、鍵盤ハーモニカ、小物打楽器である。オーディションに向けて、事前に審査基準について「音の響きを聴きながら演奏できているか」という観点が含まれることを児童に伝えていた。

・各楽器の担当児童の決定

第5学年の児童数60名を、テストやオーディションを経て各楽器の担当者に割り当てた。各楽器の担当児童数を(表1)に提示する。

リコーダーと鍵盤ハーモニカの人数の割合は、授業者がそれぞれの楽器の響きや音量を考慮し決定した。

楽器名	人数	楽器名	人数
リコーダー	27	ボンゴ	1
鍵盤ハーモニカ	6	コンガ	1
アコーディオン	8	シンバル	1
ピアノ	1	大太鼓	1
シンセサイザー	2	ティンパニ (26,32 in.)	1
バスマスター	1	マラカス、鈴	1
マリンバ	4	カスタネット	1
ビブラフォン	4	トライアングル ビブラスラップ	
小計	53		7
合計			60

表1 各楽器の割当人数(計:60名)

6. 各楽器の学習活動

(1) [リコーダー]

問題点：「自分のリコーダーの音が他の楽器の音に消される」
 原因：「パートの中でリコーダーの音が揃っていない」
 解決策：「手や身体の動きを合わせる」
 「長く伸ばす音の響きを意識して聴けるようにする」

図4 リコーダーの演奏における 問題点・原因・解決策



写真3 リコーダーの
パートの演奏の様子

楽器はソプラノリコーダーを使用した。A小学校では、ソプラノリコーダーの指導を第3学年から始めていたため、大半の児童がタンギングや正しい指遣いの習得ができていた。個人練習では、まず「音量、音程、音色」について考えさせた。児童らは第3学年の時点でリコーダーの特性についてある程度理解できていると思われるが、再度楽器の特性を意識させることで自分の演奏を客観的に捉えさせられると考えた。合奏の際には、「リコーダーの音が他の楽器の音に消される」、「自分の音が聞こえない」、「隣の友達のリコーダーの音がうるさくて集中できない」などネガティブな意見が多数出てきた。実際に、自分の音が聞こえないことを理由に息の量を強力に入れる児童も見られた。この状況を改善するために、彼らの演奏を客席側から録音し聴かせることで、リコーダーの音色が十分に客席側に届いていることと、合奏の中で主旋律を奏でる重要な役割を担っていることに気付かせた。



譜例3 リコーダーのパートの抜粋譜 第20小節～第24小節

譜例3に示す旋律は、この楽曲の主題である。この旋律は、リコーダーの運指を考えると、非常に難易度が高いといえる。児童らには、「なぜ「-」テヌートが付されている音と付されていない音があるのか、また付されている音の音符の長さを充分に保って演奏しなければならないのか」について考えさせた。児童からは「大事な音だから」や「記号が付いていない音より目立たせたいから」などの意見が出てきた。さらには、「なぜ第21小節のD音には、テヌートの記号が付いていないのか」という疑問を抱く者もいた。この事については児童らに意見を出させながら考えさせた。

第20小節のA音を始点に4度の上行による跳躍後は、大きく捉えると「D」→「C」→「bB」の下行形となっている。この下行には4度の上行を伴っており、児童らには間に入る「A」→「G」→「F」は、一時的に入る音として捉えるように指導した。このような指導は、演奏解釈論に通ずる高度な内容であるが、児童らの感想からは、「考え方を変えるだけで運指が楽になった」など、フレーズの捉え方によりスムーズに演奏できることを体感させた。

(2) 〔鍵盤ハーモニカ〕

問題点：①「音が出るタイミングが合わない」
 ②「音が大きすぎる児童がいる」
 原因：①「力の入れ過ぎ」 ②「息の入れ過ぎ」
 解決策：①「他の楽器の手や身体の動きに合わせる」
 ②「周りの音をよく聞く」

図5 鍵盤ハーモニカの演奏における 問題点・原因・解決策



写真4 鍵盤ハーモニカのパートの演奏の様子

鍵盤ハーモニカの学習は、第1学年から行っており、児童にとって最も愛着のある楽器である。この楽曲では、6名が担当した。個人練習においては、読譜に自信がある者が2名含まれていたため、定期的に音やリズムの確かめ合う時間を設け、正確な演奏を目指していた。パート練習では、ブレスの位置合わせによるフレーズ感覚の統一など、児童らが中心となり意見を出し合いながら活動していた。児童からは、アコーディオンのような手の動きから感じ取れるフレーズ感覚が鍵盤ハーモニカでは出せないため、身体の動きを伴った演奏方法の工夫に取り組みさせた。児童からは「リーダーの身体の動きに合わせて全員の呼吸が揃いやすくなる」という意見が出された。この意見を採用し、担当児童のフレーズ感覚の統一を目指して活動していた。写真4に、鍵盤ハーモニカ・パートの演奏風景を提示する。



譜例4 鍵盤ハーモニカのパートの抜粋譜 第47小節～第50小節

譜例4には、鍵盤ハーモニカが担当する旋律を示している。主旋律は上側に位置しており、下側の音と合わせて二重音になっている。楽譜上では、上側の旋律を第1鍵盤ハーモニカが担当し、下側を第2鍵盤ハーモニカと分けられているのだが、児童らの意見として「この二重音を同時に全員が演奏することで、6名で12名の音が出せる。このことで、旋律の表現を深められる」といった意見が出された。他の児童もこの意見に賛同し、互いに励まし合いながら二重音の練習に励んでいた。演奏に余裕が出てきた頃に、音を伸ばす箇所における響きを意識させ、安定した音の出し方の習得にも取り組ませた。

(3) 〔アコーディオン〕

問題点：①「音を出すタイミングが合わない」
 ②「楽器が響いていない」
 原因：①「手や身体の動きが揃っていない」
 ②「効率が悪い音の出し方をしている」
 解決策：①「手や身体の動きを合わせる」
 ②「左手の手首や腕の動きを工夫し、効率的な力の入れ方を習得する」

図6 アコーディオンの演奏における 問題点・原因・解決策



写真5 アコーディオンのパートの演奏の様子

アコーディオンは、4声部に分かれており8名が担当した。「音が出るタイミングが合わない」、「楽器が響いていない」といった問題点が見られた。原因は「互いの体の動きが揃っていない」、「楽器から効率よく音が出せていない」ことにあった。

この問題の解決策に向けた指導では、まずアコーディオンの音が、演奏者から見て右方向（鍵盤側）に出ていることに気付かせた。またペロー（蛇腹）を動かしながら音が出る仕組みや音量の変化を理解させ、客席に向けて楽器の響きを届けるための構え方を工夫させた。その際、児童らは様々な向きでの座り方を試し、最終的にはアコーディオンの音が出る側面を、客席に向けてすることで意見が一致した。また、ペロー操作に椅子の背板に手や楽器が当たらないように、正面から左45度の角度で座ることで解決できるという結論に至った。写真5は、実際に児童が演奏の際に座った状態である。

譜例5 アコーディオンのパートの抜粋譜 第20小節～第24小節

譜例5からは、ソプラノアコーディオンが主旋律を担当し、アルト、テノール、バスアコーディオンが伴奏を担っていることがわかる。特にアルトとテノールのシンクペーションのリズムが拍に合わなくなることが多かった。この原因について「左手のペローが重くて間に合わない」、「なかなか音が出ない」、「リズムが難しい」などが挙げられた。そこで効率的な腕の動きや腕力を用いた音量調整方法を工夫させた。アコーディオンの音量は、ペロー操作の力の入れ具合により変化させている。児童は、左腕の力が必要になるため、力が入りやすくなる構え方について考えさせた。「背筋をピンと伸ばす、左手でペローを押す時には肘を張る、左手でペローを引っ張る時には脇を閉じる」といった工夫を取り入れた。また左腕が疲れた際には、電子ピアノを使用した練習も取り入れた。

(4) [マリンバ]

問題点：「音量が小さい」
原因：「楽器が響いていない」
「音を出す際に力が入り過ぎる」
解決策：「手首の力を抜き、瞬間的な筋力を使って楽器を響かせる」

図7 マリンバの演奏における 問題点・原因・解決策

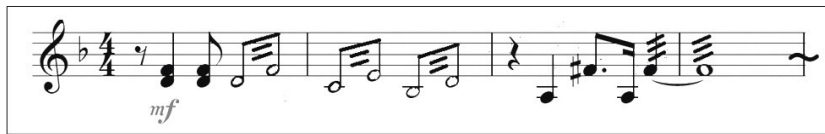


写真6 マリンバのパートの演奏の様子

4人が担当したマリンバには「音量が小さすぎる」という問題点があった。その解決に向けて「マレットの種類を変更する」方法を用いて授業者の模範演奏と比較し、原因を探った。児童らの奏法は力が入り過ぎており、音を鳴らした瞬間に音板の響きを止めていることが明らかになった。

そこで無駄な筋力を使わず、効率的に楽器を響かせる方法について、「良く響く音板の位置」と「音板の叩き方」に焦点を絞り工夫させた。児童からは「板の中心から外れると音が小さくなる」、「音板

の中心を叩くと良く響く」、「マレットを弾ませると音が長く響く」などの意見が出てきた。この活動を通し、音の響きの違いを感じながら効率的に楽器を響かせる奏法を習得させた。



譜例6 マリンバのパートの抜粋譜 第21小節～第24小節

マリンバは、主旋律の他に伴奏も担っている。譜例6に示されているように、32分音符で記された速い動きを伴ったトレモロのパッセージが含まれている。パート練習では、速いパッセージでの響かせ方や合わせ方について互いの意見を交わす時間を設けた。児童は、リズムを言葉に置き換えて全員で唱えながら演奏する練習方法を編み出した。

(5) [ビブラフォン]

- 問題点：①「音の響きが止まる」
 ②「ペダルで音を止めるタイミングが合わない」
 原因：①「音を響かせる奏法が習得できていない」
 ②「ペダル操作が習得できていない」
 解決策：①「手首の力を抜き、瞬間的な筋力を利用して音を響かせる」
 ②「ペダルの踏み込み方と音を止めるタイミングを覚える」



写真7 ビブラフォンのパートの演奏の様子

図8 ビブラフォンにおける 問題点・原因・解決策



譜例7 ビブラフォンのパートの抜粋譜 第65小節～第69小節

4名が担当したビブラフォンには、「音の響きが不自然に途切れる」ことが目立っていた。児童らには、授業者の模範演奏も参考にし、原因を探り奏法を工夫させた。

まず、譜例7に示した箇所を授業者の模範演奏を聴かせ「楽器の響かせ方」について考えさせた。児童からは「音板の中央にマレットを当てると良く響く」、「力いっぱいマレットを握らない」「ペダルの操作のタイミングを工夫する」といった方法が出された。これらの意見は、音を響かせることに重点を置いた極めて的確な提案となっており、教師による実演の観察活動の有効性が確認できた。

またペダルの奏法は「響きを意識して音を止める方法」について互いの意見を交わしながら考えさせた。児童からは「ペダルの踏みかえが遅れると音が混ざる」、「丁寧にペダルを離す」、「ペダルの踏み方は全員で揃える」等が挙がった。ペダル奏法についても響きを意識した奏法の習得に向けて練習に取り組ませた。

より客観的に聴かせることで、周りの拍に合っているかを確認させた。この問題を解決させるために、児童自らメトロノームを使用し響かせ方、周りの音の響きを聴きながら拍を合わせる練習に取り組ませた。

(8) 【シンバル】

問題点：「楽器が十分に響いていない」
 原因：「音を出すタイミングが理解できていない」
 解決策：「楽譜を読み直し音を出すタイミングを計る為に役立つ目印となる他の楽器の音を探す」

図11 シンバルの際の問題点・原因・解決策

シンバルのパートは、楽曲全体から見ると休符が多く音を出す回数は少ないのだが、トレモロによるクレッシェンドの響きを頻繁に用いられていることから、楽曲を印象付けるうえで欠かせないパートとなっている。演奏からは、音量が小さく、楽器を鳴らしきれていない状態を解決するために原因を明らかにし、奏法を工夫させた。



写真9 シンバルの演奏風景



譜例10 シンバル 抜粋譜 第1小節～第5小節

譜例10に示すシンバルのパートは、前述にあるように第1小節から第4小節の第2拍まで休符が続き、同小節の第3拍からトレモロ奏法によるクレッシェンドの響きが用いられる。この休符の間は、ボンゴとコンガによる演奏が入る。

担当した児童は、クレッシェンドの際に、手首が固くなるクセがあったため、「瞬間的に筋力を使うことで力が入り過ぎないようにする」という解決策を見出した。

(9) 【ビブラスラップ・トライアングル・カスタネット】

問題点：「楽器が十分に響いていない」
 原因：「楽器の仕組みがわからない」
 解決策：「楽器の仕組みに関する説明を聞き、最大限に楽器を響かせる方法を習得する」

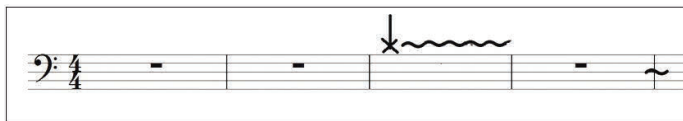
図12 ビブラスラップの演奏における問題点・原因・解決策



写真10 ビブラスラップ・トライアングル・カスタネットの演奏の様子

担当児童の演奏からはビブラスラップの響きを最大限に

引き出せていなかった。ビブラスラップは、持つ位置や手の握り加減で響きが変化するので、球を叩いた後、金属部分を長く押えないように



譜例11 ビブラスラップの抜粋譜 第5小節～第8小節

すると音が持続することを児童は試行錯誤の末、理解した。

トライアングルは、楽器の叩く場所により響きが異なることに気付かせた。リズムの違いに合わせて叩く場所を変えることの必要性についても理解させた。

カスタネットは、楽器が良く響かせられる力の加減を工夫させた。

(10) 【マラカス・鈴】

問題点：「楽器が十分に響いていない」
原因：「どのあたりで音を出せばよいかわからない」
解決策：「楽譜を読み直し、音を出すタイミングの把握に役立つ目印となる他の楽器の音を探す」

図13 マラカスの演奏における問題点・原因・解決策

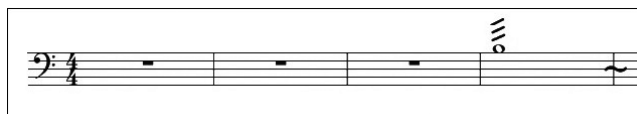


写真11 マラカスと鈴の演奏の様子

マラカスと鈴は、1人の児童が担当した。マラカスの演奏の問題点は、響きを最大限に引き出せていないことであった。これについて原因を明らかにし、奏法を工夫させた(図13)。

音を出し忘れることがないように気を付けさせた。児童からは、「タイミングがわかっても、構えるまでに時間が掛かり出遅れることがある」という意見が出た。この解決策は、「マラカスにストラップを付けて首にかけられるようにして、スタンドに立てかけた鈴を持ち上げるスピードを上げる」といったアイデアが出された。マラカスの音の響きにも注目させ、マラカスの音を速く断続的に響かせる方法について考えさせた。

マラカスの音は、単独では乾いた音で響くが他の楽器の音と重ねると目立たなくなる。そのため、ビブラスラップやカスタネットと同様に、他の楽器の音が静まったタイミングで鳴らすよ



譜例12 マラカスのパートの抜粋譜 第1小節から第4小節

う作曲されている。楽曲の節目で特徴的な音色で鳴るため、演奏のメリハリにも活用できる。マラカスの音は他の楽器奏者がタイミングを計るために役立っていた。

鈴の響かせ方については、響きを止めることが難しいため、響かせた後の動作を工夫させた。軽い屈伸運動を利用して、自然な響きで音が止められるような演奏の工夫を引き出すことができた。

(11) 【シンセサイザー】

問題点：「音量が大きく目立ちすぎる」
原因：「演奏中に音量レバーを調整していないため」
解決策：「自分が出す音の響きと、周りの音の響きを聴きながら演奏中に左手で音量レバーを調節する」

図14 シンセサイザーの演奏における問題点・原因・解決策



写真12 シンセサイザーの演奏の様子

シンセサイザーは、指の圧力では音量が変化しないため、他の楽器の音や自分の音が聴き取りづらくなっていた。この問題点の

解決に向け、音量レバーを適宜調節するよう工夫させた。



譜例13 シンセサイザーのパートの抜粋譜 第47小節から第50小節

また、さまざまな音を奏することができるため、合奏で取り入れることのできない楽器の代用としても使用した。譜例13は、本来フルートのパートであるが、小学生の器楽合奏ではシンセサイザーによりフルートの音を出していた。さらに、楽器の種類を増やしたいという児童らの希望により、授業者が編曲したトランペットのパートもシンセサイザーで代用した。

(12) [バスオルガン]

問題点：「他の楽器との音量のバランスが取れていない」
 原因：「演奏中に音量レバーを調整していないため」
 解決策：「自分が出す音の響きと、周りの楽器の響きを比較しながら演奏中に左手で音量レバーを調整する」

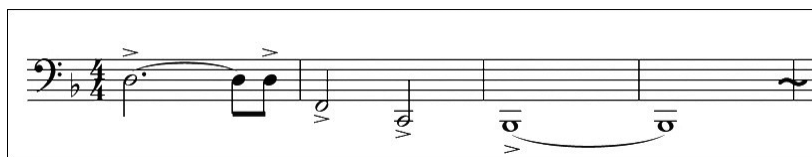
図15 バスオルガンの演奏における問題点・原因・解決策

バスオルガンは、合奏で使用する楽器の中で、最低音を担当し、演奏を支える重要な役割を担っている。演奏からは、他の楽器との音量バランスが取れていないことが目立った。担当する児童は、この問題点の解決に向け、演奏中のボリューム調整を工夫させた。

バスオルガンもシンセサイザーと同様に、事前の音量調整ができないため、左手は低音パートを演奏し、右手で音量調整レバーを操作していた。写真13は、担当児童が実践しながら演奏する様子である。



写真13 バスオルガンの演奏の様子



譜例14 バスオルガンのパートの抜粋譜 第9小節～第12小節

譜例14のように、第11小節からは最低音の**B**音が2小節にわたり響く。児童からも「バスオルガンの音が目立ちすぎるため、曲の流れに合わせて途中で音量を変化させたい」という意見が出された。そこで、ティンパニやシンバルのクレッシェンドの際には、互いの最大音量の到達点を意識してタイミングを合わせて響きの掛け合いにより演奏効果を高めさせた。

(13) 【ピアノ】

問題点：「重厚な低音が響いていない」
 原因：「楽器の響かせ方を理解していない」
 解決策：「指先に体重をかけ音が濁らないようにペダルを踏む」

図16 ピアノの演奏における問題点・原因・解決策



写真14 ピアノの演奏の様子

連合音楽会の本番では、スタンウェイのフルコンサートグランドピアノを使用する。担当児童の演奏は、楽器を十分に響かせられていなかった。本番の楽器を想定し、重厚な低音を響かせるための奏法を試行錯誤させた。その結果、指先に体重をかけ音が濁らないようにペダルを踏むことによりダイナミックな音量を出す工夫を引き出すことができた。



譜例15 ピアノの抜粋譜 第9小節～第12小節

7. 全体練習での表現指導(第1回～第8回)

11月からは全体練習を体育館で始めた。広い場所での練習を通し、互いの音色や響きを感じながら客席に音を届けるための表現の工夫に取り組んだ。演奏をビデオで収録し視聴させることで、演奏の向上を目指して互いの意見や感想を交わす活動を行った。児童からは「自分の音が聴こえない」「演奏中の箇所がわからない」「音を出すタイミングが合わない」などの意見が出てきた。この課題の解決に向けて、演奏の速度を遅くし打楽器の音量を小さくすることで、自分が出す音を感じ取りやすくする工夫を行った。

また、マリンバとアコーディオン、ビブラフォンとリコーダーというように、分散して合奏し、互いの音の響きを確認する活動を取り入れた。これにより、全体合奏の際に各楽器の音色を聴き分け響きを感じるにより、音を出すタイミングが揃うようになった。

次に、強弱表現の工夫に取り組ませた。音量の調整は、楽器の種類により方法や特性が異なる。打楽器のようにマレットで叩く場合には、強さの加減で音量が変化するが、リコーダーは息の入れる量に合わせ音程が変動する。そのため、奏者の人数調整により音量に変化を付けることにした。また鍵盤ハーモニカも同様に息の量を増やすと音程が乱れるうえ耳障りな響きとなることが問題となったため、無理のない息の入れ方を徹底し、奏者の人数を増減させることにより変化を付けた。

続いて、全体の拍を合わせる練習に取り組んだ。合奏では、授業者が指揮し、児童ら全員の息が合うように指示を出した。当初は、指揮者を見る余裕がない児童もいたが、指揮者の身体や手の動きに合わせることで拍を揃えることを心掛けさせた。

続いて、6小節間にわたる息の長いクレッシェンドの表現の工夫に取り組んだ。まず、音量の頂点を意識したフレーズ感覚を身に付けるために、各々のパートを全員で歌った。続いて、フレーズのブレスの位置でセクションを前後に分け、後半から音量を一段小さくすることで息の長いクレッシェン

ドを表現した。

このような学習を重ねるうちに、暗譜で演奏が出来るようになっていった。

8. 音楽集会での発表会（保護者や在校児童や教員向け）と連合音楽会の本番

連合音楽会の本番前に、保護者や在校児童や教員向けに校内で発表会を行った。児童らには、間近に迫る本番の緊張感を味わわせることができた。また、校内での発表後には振り返りの時間を設け、演奏の良い点や改善が必要な点について感想や意見を出させた。

写真15は、連合音楽会の本番での演奏の様子である。

当日は、朝8時から約30分間、体育館練習を行い8時45分に、バスに乗車してホールに向かった。演奏会場での行動は、秒単位で綿密にスケジュールが組まれていた。児童らは、テレビ放送局や、ビデオ業者による撮影が入ることを知り、期待に胸を膨らませていた。ホールに到着した児童らからは、「きれい」や「ひろーい」、「あんなに高いところにも座席がある」、「舞台が広い」など、気持ちが高まる様子が伝わってきた。連合音楽会が始まると、自分たちの出番までの間、他の小学校演奏を聴くことになる。「あの学校の演奏には負けたくない」や「演奏するのが楽しみ」といった前向きな気持ちが感じられた。演奏発表後には、「先生、何位だったかな」や「どんな感じだった」など、非常に興奮した様子で感想を求められた。連合音楽会は、順位を付けることはないが、同学年が一堂に会する場であるため、他校の児童をライバル視していることが感じとれた。また、児童らが自主的に他校の演奏を評価するなど、授業での取り組みが効果を発揮していることが確認できた。



写真15 連合音楽会

9. 連合音楽会の振り返り学習

振り返り学習のアンケート調査は、連合音楽会の当日、帰校してからすぐに実施した。

「響きを意識した演奏」に関する質問項目には、「問題点が残る」4%、「満足のいく演奏だった」83%、「問題点は残るが満足できる」13%と回答があった。このように、響きを意識した活動は最後まで一貫して続けられた。

アンケートから得られた担当楽器の児童の感想の一部を記述する。

【リコーダー：27名】かなり長く練習してきたので楽譜を見ないで吹けた。一人だと小さい音でも27人で吹くと大ホール全体に自分たちのメロディーが響きわたっていた。

【鍵盤ハーモニカ：6名】たくさん練習すると楽譜を見ないで吹けた。自分のパートの出だしをしっか

りと吹けた。他の楽器の響きを聴きながら自分のパートもしっかりと吹けた。同じ楽器の上手な友達に教えてもらって余裕で吹けた。大ホールで気持ちよく演奏できた。

【アコーディオン：8名】客席から近いためかなり緊張した。演奏を始めてから。座りやすいイスだったので安心してペロー操作ができた。楽器の音がホールに良く響いていた。

【ピアノ：1名】いつもより鍵盤が重く感じた。低音が良く響くピアノだった。低音に体重をかけて演奏した。

【シンセサイザー：2名】学校の楽器と同じタイプなので安心して音量の調整ができた。

【バスオルガン：1名】ホールに自分が出した音が吸い込まれるような感じがした。音が聴きづらかった。いつもより指揮者の動きをしっかりと見ることができた。

【マリンバ：4名】トレモロが叩きやすかった。音がホールに良く響いていた。

【ビブラフォン：4名】ペダルが少し重かった。いつもより良く響いていた。

【ボンゴ：1名】いつもよりも音が大きくなっていくように感じた。急がないように気を付けた。

【コンガ：1名】少し楽器の位置が高かったので叩くのが大変だったので背伸びをしながら叩いた。普段使用しているコンガよりもよく響いていた。ワクワクするリズム感で演奏できた。

【シンバル：1名】いつもよりも音が良く出ていた。普段使用している楽器より大きかったので迫力が出た。クレッシェンド奏法もやりやすかった。

【大太鼓：1名】普段使用している楽器より大きかった。音が良く響いた。音を止めるときは力いっぱい止めた。

【ティンパニ：1名】トレモロ奏法が綺麗に決まった。普段よりも音が大きくて驚いた。

【マラカス・鈴】マラカスの音がホールに良く響いた。緊張していたのだが、集中して指揮者に合わせられた。

【ビブラスラップ・トライアングル・カステネット】自分で出した音が良く響いていた。指揮者をよく見ていたので拍が合わせやすかった。

10. まとめ

本項に至るまで、器楽合奏《アフリカン・シンフォニー》の選曲から完成、振り返りと学習過程を詳細に検証してきた。「音の響き」に着目した指導を行った結果、以下のような効果を得ることができた。

選曲において、児童が気に入った楽曲を取り入れることで学習意欲が向上した。また初期の学習において、基本となるリズムと主旋律を全ての児童が習得することで、楽曲への理解を促進し、以降の学習が円滑に進むようになった。各楽器の演奏指導においては、問題点と原因、解決方法を児童が自分たちで探求できるようにすることで、演奏法の工夫を促すことができた。全体練習では、本番会場である2000人収容の大ホールを想定し、体育館等広く残響の多い場所で指導を行った。合奏として会場に響く音色を意識させる指導を行い、録音や録画も取り入れながら問題点と解決策を話し合わせることで技能と完成度の向上を目指した。その結果、各楽器のバランスを意識した合奏に仕上げることができた。

本番終了後、振り返りを行った際の感想文には、試行錯誤を重ねて奏法の工夫に取り組んだ結果、良い響きを実現できた児童の達成感が表れており、本研究で実践した指導法の効果を明らかにしている。

以上のことから、「良い響き」を求めた楽器奏法の工夫に着目した指導は、児童の探求心を高め、器楽合奏の完成度を向上させることができるとの結論を得た。

本研究が、将来小学校の教員を目指す学生や現職教員の方々への、一つの参考となれば、この上ない喜びである。

参考文献

- 1) 文部科学省(2017): 小学校学習指導要領 解説編.
- 2) 角倉 一郎(監修); 片桐 巧; 庄野 進; 土田 英三郎; 寺田 まり子; 西原 稔; 森 泰彦(2017)『音楽図解事典』東京: 白水社.
- 3) 平井 裕也(2016): 「子どもの表現力向上を目指す教材開発 - 口頭伝承を活かしたラグタイム指導を例に一」 『聖徳大学 音楽文化研究』15: 1-15.
- 4) 平井 裕也(2021): 「小学校の学級経営の充実を図る音楽活動 - 小学校での実践を基に一」 『常磐大学 教育実践研究』5: 71-94.

令和3年10月1日受理

A study on teaching method for the School Band,
preparing for the Union Concert of
Elementary Schools
— Research for obtaining “rich sound” for each
instrument, by teaching performance technique —

HIRAI Hiroya and HIRAI Rie